

記者資料提供 2024 年 6 月 10 日

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) 大泉

TEL | 078-325-2235 FAX | 078-325-2230 E-mail | info@kiito.jp



KIITO:

〈災間スタディーズ：震災 30 年目の“分有”をさぐる〉 #2 ディスカッション「記録を集め、受け渡す」

神戸市の都市戦略「デザイン都市・神戸」の拠点施設である「デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)」では、社会貢献活動の活性化や創造性を育むさまざまな活動に取り組んでいます。この取り組みの一環として、次のとおりトークイベントを開催いたします。



災厄をめぐって、アートやアーカイブの視点からリサーチを行うゲストを迎え、渦中に生きる人びとが生み出す記録や表現の力について考える、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) と災間文化研究会によるプロジェクト「災間スタディーズ」。この度、シリーズの第 2 回目として、#2 ディスカッション「記録を集め、受け渡す」を開催する運びとなりました。

第 2 回では、官民双方の立場から被災記録の収集、保存、活用に尽力してきた佐々木和子さん（震災・まちのアーカイブ会員、神戸大学人文学研究科学術研究員）をゲストにお迎えします。佐々木さんはこれまでに、行政の立場では兵庫県の資料収集事業（のちに「人と防災未来センター」に移管）に携わり、民間の立場では、神戸市長田区「震災・まちのアーカイブ」での資料収集、保存、活用に携わってこられました。

佐々木さんは「震災資料とはなにか」と問われたとき、「震災に関わるものは何でも」と答えます。これは、佐々木さんが関わってきた活動に共通する理念だといいます。

ディスカッションでは、約 30 年に亘る取り組みを振り返りながら、活動するなかでどのような記録や人びとの出会いがあったのか、「記録を集め、受け渡す」ことの切実さについて、災間文化研究会とともに考えます。

事業名：〈災間スタディーズ：震災 30 年目の“分有”をさぐる〉 #2 ディスカッション「記録を集め、受け渡す」

日時：2024 年 9 月 28 日（土）14:00～17:00

会場：デザイン・クリエイティブセンター神戸 2 階 ギャラリーC

参加費：無料

定員：30 名（先着順、要事前申込）

申込：2024 年 8 月 1 日（木）より申し込み受付開始。ウェブサイト (<https://kiito.jp/>) よりお申し込みください。

ゲスト：佐々木和子（震災・まちのアーカイブ会員、神戸大学人文学研究科学術研究員）

聞き手：佐藤李青、高森順子、宮本匠（災間文化研究会）

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、災間文化研究会

【ゲストプロフィール】



佐々木和子

震災・まちのアーカイブ会員、神戸大学人文学研究科学術研究員

1996年12月から2002年3月まで兵庫県による震災資料収集・保存活動に嘱託として従事。1998年3月震災・まちのアーカイブ設立にかかわり、現在活動中。その間、研究員、ボランティアとして、阪神・淡路大震災にはじまる震災資料収集・保存に取り組む。



写真左より：まちのアーカイブ外観（～2017）、まちのアーカイブ棚、瓦版なまず 1号

【災間スタディーズ：震災30年目の“分有”をさぐる】

災間の社会を生き抜く術として、災厄の経験を分有するための表現の可能性をさぐるリサーチプロジェクト。「災間」「分有」という2つのキーワードを軸に、阪神・淡路大震災から30年を迎えようとする2025年に向け、震災を経験した地で行われた活動と、それによって生まれた記録や表現に光をあて、さまざまなリサーチやプログラムを通して、継承の糸口をさぐる。

【災間文化研究会】

さまざまな災厄の間（あいだ／なか）を生きているという「災間（さいかん）」の視点に立ち、社会を生き抜く術としての文化的な営みに目を凝らし、耳を傾ける試みを行うグループ。2021年に実施したTokyo Art Research Lab「災間の社会を生きる術（すべ／アート）を探る 災害復興へのいくつもの「かわり」から」でのディスカッションをきっかけに活動を開始。メンバーは佐藤李青（アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー）、高森順子（情報科学芸術大学院大学 研究員、阪神大震災を記録しつづける会）、宮本匠（大阪大学大学院人間科学研究科 准教授）、小川智紀（認定NPO法人STスポット横浜 理事長）、田中真実（認定NPO法人STスポット横浜 事務局長）。それぞれ異なるテーマをもって活動し、災間の社会における“間”で動くメディアとしてのふるまいを模索している。2023年5月、記憶を〈分有〉する表現にまつわるメールマガジン「分有通信」発行。bun-tsu編集部には編集者の辻並麻由が参加。

【阪神大震災を記録しつづける会】

阪神・淡路大震災の体験手記を集め、出版する市民団体。阪神・淡路大震災の約1ヶ月後の1995年2月中旬より、神戸で印刷業を営んでいた高森一徳を発起人として活動をはじめ。同会の最初の活動は「震災にかかわったすべての人」を対象に、「原稿用紙5枚程度の自作未発表の体験記、および関係写真」の募集であった。募集ポスターは韓国語、中国語、英語にも翻訳され、外国にルーツをもつ人びとからの手記が広く寄せられることも目指された。1995年5月に最初の手記集『阪神大震災 被災した私たちの記録』を出版。手記集の出版は、約1年に1度のペースでおおよそ10年にわたって続いた。10巻までの投稿総数は1,134編。10巻の脱稿後の2004年12月に一徳が急逝し、約5年間の活動休止を経て、2010年に一徳の姪である高森順子が事務局長となり活動を再開した。震災から20年目の2015年には10年ぶりの手記集を出版。25年目の2020年には、これまでの執筆者へのインタビューを収録した記録集を出版し、現在まで活動を続けている。